

今月の技術対策 (畑作編)

留萌農業改良普及センター

TEL : 0164-62-1779 FAX : 62-2474

E-mail: rumoi.nakanoukai1@pref.hokkaido.lg.jp

水稲・園芸編も
HPで公開中!

【麦類】

1 収穫後のほ場管理

(1) 土壌物理性の改善

小麦収穫後は、土壌が乾燥しやすく土壌物理性の改善に好適な条件となります。
夏期の土壌水分が低い時に心土破碎や暗渠の施工を行いましょう。

(2) 麦稈の処理

- ①収穫後、麦稈は速やかに持ち出すことを基本とします。
- ②麦稈をすき込む場合にはストローチョッパー等で細断してからプラウですき込みます。
ただし、すき込まれた麦稈により、後作物に窒素飢餓が生ずることから、後作物植え付け時に窒素増肥することが必要です。

(3) 緑肥作物の栽培

- ①収穫跡地に緑肥作物を導入し、地力の向上に努めましよう。緑肥の導入効果を高めるため、小麦の収穫後速やかには種し、収量を確保ましよう。
- ②えん麦の場合にはできるだけ「えん麦野生種」を選択ましよう。また、イネ科作物の作付けが多い場合には「シロカラシ」や「ひまわり」を選択ましよう。
- ③緑肥作物は野良生え防止のため、結実前に必ずすき込みましよう。

表 小麦後作緑肥の種類 (例)

緑肥作物名	窒素施肥量 (kg/10a)	は種量 (kg/10a)
えん麦	4~6	15~20
えん麦野生種	5	10~20
ひまわり	4~6	1.5~2
シロカラシ	5~8	2

出典：北海道緑肥作物等栽培利用指針（改訂版）

(4) やむを得ず連作する場合

- ①異品種が混ざらないよう「野良生え麦」を確実に出芽させてから、は種前にグリホサート系除草剤で処理した後は種作業を行いましよう。
- ②は種日が早すぎる傾向にあります。極端な早まきは過繁茂や冬枯れを助長するので、「適期は種」に努めましよう。

【豆類】

1 病害虫防除

(1) マメシクイガ (大豆)

マメシクイガは土中で繭の状態越冬するため、連作や昨年の作付けほ場と隣接する場合には発生が多くなるので注意しましょう。

防除は莢伸長始（長さが2～3cmに達した莢が全体の40～50%の株に認められた日）が確認できた6日後を目処に合成ピレスロイド系の薬剤を散布し、その10日後に有機リン系の薬剤を散布しましょう。



写真 マメシクイガ

～農薬使用時にはラベル等で登録内容を確認願います～

表 マメシクイガの防除体系例

(水量100L/10a散布)

時期	薬剤名	系統名	使用倍率	使用回数	使用時期
莢伸長始 から6日後	トレボン乳剤	合成ピレス	1,000倍	2回	収穫14日前まで
	バイスロイド乳剤	ロイド系	2,000倍	3回	収穫7日前まで
	ゲットアウトWDG		3,000倍	3回	収穫7日前まで
1回目防除 から10日後	トクチオン乳剤	有機リン系	1,000～ 1,500倍	3回	収穫30日前まで
	エルサン乳剤		1,000倍	2回	収穫7日前まで

(2) 菌核病・灰色かび病 (大豆・小豆)

大豆は開花始後10～15日後、小豆は開花始後7～10日後に1回目の茎葉散布を行います。過繁茂状態で風通しが悪いと発生しやすいため、ほ場を確認しながら7～10日おきに計3回防除を行きましょう。また、耐性菌の発生が認められるため、同じ薬剤を連用しないようにしましょう。

(3) アズキノメイガ (小豆)

7月下旬～8月上旬頃が産卵盛期になるので、最盛期から7～10日間隔で防除を行きましょう。

2 除草

生育の不揃いなどで雑草発生が多いほ場では、雑草が結実する前に抜き取り、大豆の汚粒防止及び翌年以降の雑草の発生防止に努めましょう。特に、大豆の立毛中に秋まき小麦をは種する計画がある場合は、除草を徹底しましょう。